

《特集緒言》

金沢工業大学訪問の趣旨と経緯

堀籠 崇, 中村 隆志 (新潟大学)

はじめに

キャリア創生研究会 (仮) は、2017 年の研究会創設以来 3 年にわたり着実に活動実績を蓄積してきた。研究会創設の経緯は堀籠 (2019) に詳しいが¹、これまで本研究会が学問分野の枠を超えて多面的な視角から課題解決に向かうことのできる人材の育成の為に必要なものとはなにかを探究し続けてきたことは間違いない。とりわけ文系の各専門領域に関わる人材育成の具体的な取り組みを中心に情報共有や意見交換を行ってきた。

さて今回の金沢工業大学訪問における直接のきっかけは 2018 年度の活動にある。2018 年度は、「接続・交流・連携を目指す初年次教育の意義と課題」を明らかにすべく、とりわけ異業種/多職種連携教育 (IPE) としての初年次教育について、先端的で野心的な取り組みを続ける昭和大学富士吉田キャンパスを視察した。そこで我々が学んだものとは、異業種/多職種連携を目指す教育のプロセスにおいて、異なる領域を専攻する学生同士の接触の機会をいかにして提供するかという点が非常に重要な意味を持っているということである。我々は昭和大学富士吉田キャンパスの視察においてキャンパスそのものが異業種/多職種連携を意識して設計されており、施設面でもそういった点に向けた配慮や工夫が多数なされていることを目の当たりにした²。

2018 年度の昭和大学富士吉田キャンパス視察を終えて我々に生じた新たな疑問は、医療関連職同士のよう、いわばキャリアに直結した連携教育ではなく、キャリア非直結型の学部における連携教育にはどのような課題と可能性があるのかという点にある。さらに言えば、自然科学と人文/社会科学との領域を超えた教育を展開する上でキーとなるものは何かということである。実のところそれは、新潟大学創生学部が学部の

開設以来直面している課題でもある。すなわち文理融合の新潟大学創生学部では、文系教員も自然系の人材育成の実際に触れ、その具体的文脈のなかで知見を深めることが重要であると考えようになったわけである。

全国の多くの大学で「文理融合」が叫ばれている。新潟大学創生学部のみならず、従来型の大学教育に対する反省と、複雑化する現代社会の要請とによって、社会課題の解決に資する人材育成において、社会に向けた学問的知の活用や実装を第一とする学部が現れ始めている。しかしながら実際問題として、果たしてどれほどの大学が真の意味で「文理融合」した高等教育を展開できているであろうか³。我々自身に対する自戒も込めて、この問いに正面から向き合う必要性を感じている。

見学調査の概要

Table 1. 金沢工業大学 調査概要

日時	2019 年 9 月 9 日 10:30~12:00
応対者	金沢工業大学 情報フロンティア学部 出原立子 教授 同 事務局 新井真二 様
訪問者	新潟大学 創生学部 中村 藤巻 渡邊 田中 堀籠 並川

こうした新たな課題を前にした 2019 年の 5 月に本研究会内部において、渡邊より自然科学系領域で PBL を主体とした教育を展開し、高い実績を誇る金沢工業大学の教育実践に関して、実際に訪問しての担当者インタビューならびにキャンパス見学の計画が提案され

¹ 堀籠 (2019) pp.4-6 を参照。

² 創生ジャーナル Human and Society 編集委員会 (2019) pp.13-14 を参照。

³ とは言うものの、そもそも「文理融合」とはいかなる状態を指すのかも判然としないし、方法論としてそのような高等教育に関する何らかのパターンがあるのかについても、ここで示すことはできない。そういった点も含めて、現在の高等教育の変化を丁寧に整理分析する必要

があろう。ここではさしあたって、文系と理系とが領域を超えた教育を協働で展開するとともに、そのことによって従来型の教育からは生じ得ないような新たな価値が付加されること (新たな学問領域の発生も含め) を意図している。すなわち J.A. Schumpeter が言うところの「new combination ; 新結合」としての「innovation ; イノベーション」を念頭に入れている。Schumpeter のイノベーション概念については、Schumpeter (1926) [邦訳 1977] を参照。

た。この提案を受け、研究会を代表して中村がメールにてキャンパス見学ならびにインタビュー依頼を行い、その後我々の不躰な依頼に対して、金沢工業大学情報フロンティア学部教授出原様、同事務局新井様よりご快諾をいただき、金沢工業大学扇が丘キャンパスへの訪問が実現した (Table 1)。具体的なインタビュー項目は以下の通りである。

大学の方針と特色
鍵となる施策
特徴的授業
意思疎通の仕組み
現段階の課題

改めて金沢工業大学は、東洋経済オンラインのランキング⁴などでも学生を「育てる」取り組みと就職に至る支援がとりあげられ、高等学校進路担当教員や企業などから絶大な評価を得ている。同大学の掲げる「将来の科学技術振興に柔軟に対応する技術者・研究者の養成」という理念⁵が、大学の具体的な仕組みや取り組み、人員構成などにどのような形で反映され、教職員のモチベーションや意欲にいかなる影響を与え、PBL授業などをも含む教育的場面にどのように具体化されているのか、学生や地域社会はそれをどう受け止めているのかなど、他大学には見られない同大学独自の技術者育成のエッセンスとはいかなるものか。本稿以下掲載の論文では、インタビューと見学を通じて我々が得たものについて、それぞれの著者の専門分野や関心をもとにまとめられている。これら一連の論文を通じて、領域を超えた高等教育の未来についてのヒントが示せれば幸いである。

謝辞 金沢工業大学情報フロンティア学部出原立子先生ならびに同事務局新井真二様には、今回の調査において、大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

参考文献

堀籠崇 (2018) . 本実践の位置づけと経緯 創生ジャーナル Human and Society 14-6.
井沢秀 (2019) . 「本当に強い大学」ランキングトップ150 ; 最新 ! 19 年卒業生の実就職率, 1 位は金沢工

大 東洋経済オンライン, <https://toyokeizai.net/articles/-/294197> (2020 年 1 月 27 日, 最終アクセス)

J. A. Schumpeter (1926) . *Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung*, 2. Aufl. [塩野谷祐一, 中山伊知郎, 東畑精一訳 (1977) 経済発展の理論 (上) (下) 岩波文庫]

KIT 金沢工業大学 HP. <https://www.kanazawa-it.ac.jp/> (2020 年 1 月 27 日, 最終アクセス)

熊野英和 (2019) . 高大連携の取り組み—酒田東高校との協働—人工知能・ロボットは人を幸せにするか?— 創生ジャーナル Human and Society 2 40-41.
創生ジャーナル Human and Society 編集委員会 (2019) . 異業種/多職種連携教育 (IPE) としての初年次教育——昭和大学富士吉田キャンパス見学調査—— 創生ジャーナル Human and Society 1 13-14.

⁴ 井沢 (2019) を参照。

⁵ KIT 金沢工業大学 HP を参照。